

|   |   |
|---|---|
| <p>上演 2</p> <p>2022年7月31日(土) 2校目</p> <p>関東 ブロック (埼玉県)</p> <p>埼玉県立 秩父農工科学 高等学校</p> <p>「Brilliant Life」</p> | <p>第46回全国高等学校総合文化祭演劇部門<br/>第68回全国高等学校演劇大会</p> <p>講評文</p> <p>生徒講評委員会 担当委員</p> <p>(徳島県) 徳島県立富岡西高等学校</p> <p>西川 聖</p> |
|---|---|

誰もか悩みながら通る進路選択、友情、恋愛を非現実的に見えて実は現実味がある内容で描いている劇であった。

3年になり進路選択に悩むヒヨリ・モエカ・ユカリ・セレナ・リク・カイハイそしてそれを見守る AI のアイコ。指定校推薦で進学または推薦で就職を決めようと考えているメンバーが多い中、それぞれの希望する大学や就職先を言い合ったり、保身のため、黙っていたりする。そんな中で、たまたま全員の希望が大手企業である B ライフ(ブリリアントライフ)への推薦での就職であることに気づく。将来がかかっていることや校内からの推薦枠が少ないことが6人の不安を煽り、関係に亀裂を入れ始めようとしている。また、AI であるアイコに無謀な恋をしてしまったヒヨリは…。

何も見えない暗闇の中、音楽と赤のような光とともに大きな壁が姿を現す。教室という身近な場所で繰り広げられる演技は、思春期の高校生が持つ様々な悩みを的確に表現し、観客の年齢関係なく共感できる部分が多く存在し、観客を物語の世界に引きずり込んでいた。

内気な少女であるヒヨリと AI であるアイコの会話は思わず引き込まれてしまった。特に物語終盤、ヒヨリのアイコに対する気持ちが明確に伝わってしまい、それが原因でアイコの記憶がリセットされる場面は、見ている私たちも辛くなってしまった。また、6人の関係性にも偽りの部分があると初めは思った。が、物語が進むにつれて6人はぶつかり合いながらも互いを理解しあっていき、最後には、本当の友達になったのだと感じさせられた。

観客が最初から気になっていた赤い壁は、体内に血が流れていないアイコと、流れているヒヨリを表しているように感じたり、乗り越えなければいけない壁の象徴であると感じた、等劇を観るもので十人十色の意見があった。

この作品の討論中、一番講評委員が口にした言葉は、タイトルであるブリリアントライフに対する最適解であった。答えは見つけてしまったら簡単だが、なかなか見つけることができない。AI が持ち合わせている最適解は実は違って、生きていく中で、自分自身の力で最適解を探し、そして見つけて選ぶ。どんな困難な壁があろうとも乗り越え、生きること輝きを持つ、この行為すべてがブリリアントになり、最適解なのではないかという結論に達した。環境が似ていなくても、同じ高校生というだけで共感し、その悩みと向き合い最適解を探し、必死に努力をする高校生の劇に胸を打たれ、涙した。